



有害駆除の今を探る

昨年度のクマの大量出没ニュースは皆さんの記憶に新しいと思いますが、このクマ類のほかイノシシ、シカやサルによる農作物被害や住宅地域への出没が全国的な問題となっています。被害の対策として、問題を起こした野生鳥獣を有害鳥獣として駆除する、つまり個体数調整がおこなわれてきました。しかし、残念ながら農作物および出没被害は減少していないのが現状です。

これを受けて今年の6月に、自民党の有害鳥獣対策議員連盟が、「有害鳥獣による農林漁業被害が拡大・深刻化しているとして、その対策のために自衛隊の出動を可能とする議員立法の制定を予定している」ことが報道されました。そして自衛隊の出動の可否については、JBNのメーリングリスト上でも盛んに議論がなされました。そこで今回の特集では、各地の取り組みや事例をご紹介いただきまして、野生動物管理の場に自衛隊が登場する案が出たいきさつを探ってみたいと思います。



減少していく狩猟者、その要因は？

葛西真輔（知床財団）

現在の狩猟者数は全国で約20万人、1970年代におよそ50万人いた狩猟者は減少を続けています。また、狩猟者の年齢別構成も50代以上がおよそ8割を占め、40代以下が少ないといういびつな年齢別構成になっています。私の所属する北海道猟友会斜里分会も同様な状況で、特に20、30代の会員数が極端に少なくなっています（55名ほどの会員中、20代の会員は私1人、30代の会員は2名です！）。それでは、なぜ若者が狩猟を敬遠するのでしょうか？以下に私の考える要因をいくつか挙げてみました。

①狩猟を始めるのは金、労力がかかる！

狩猟を行うためにはかなりの初期投資が必要です。私の場合、手続きだけで10万円ほどかかりました。また、費やした労力も相当なものでした。申請や講習、許可の受け取りなどなど警察署には何回も足を運びました。そのほかにも、狩猟免許試験、射撃講習、病院での診断書の発行などなど、銃の所持と狩猟免許に関する諸手続きが多数ありました。正直言ってかなり面倒くさいものでした（銃を持たせないためにわざと面倒くさい手続きにしているのではないかと思います！）。さらに、狩猟を始めるためには、この手続きに加えて銃、銃ロッカー、弾ロッカーなどを購入する必要があり、まともに購入すればさらに20～30万円の投資が必要となります。

②狩猟に関する情報が少ない！

狩猟を始めて困ったことは、狩猟に関する情報があまりにも少ない点です。例えば、銃の取り扱い方法、弾の選び方、手入れの仕方、どこに獣がいるのか、獣の捕り方などです。狩猟に関する書籍、インターネットによる情報などは、釣りなどの大衆的な趣味に比べると圧倒的に少ないというのが現状です。こうした情報不足が狩猟を始めるための間口を狭めている可能性があります。

③狩猟免許、銃の所持許可を維持するのも大変

狩猟免許、銃の所持許可は3年に1度更新する必要があります。また、狩猟者登録のための費用（約3万円）が毎年必要なほか、警察で銃の検査を毎年受ける必要があります。こうした手続きは平日に行われることが多く、会社勤めをしている人にとっては負担が大きいのではないのでしょうか。

普通の人にとって、狩猟を始めるのはハードルが高そうだということが、ご理解いただけたでしょうか？もし私が東京で普通の会社勤めをしていたなら、まず狩猟者にはなっていないと思います。

狩猟自体はとても面白い趣味です。狩猟者の減少をすこしでも食い止めようと、狩猟者になるための講習会を開催する自治体もあるようです。放置しておけば、10年後、20年後にはさらに狩猟者数は減少するのは確かです。野生動物の対策には狩猟者の存在は欠かせません。上記のような問題が少しでも緩和されるような施策が望まれます。



猟区制度を利用した狩猟者育成

伊吾田 宏正 (酪農学園大学 生命環境学科)

野生動物の調査研究と管理活動において狩猟者の果たす役割は小さくありません。狩猟者の経験知はしばしば研究の重要な情報になりますし、狩猟者は個体数調節や被害対策の重要な担い手となります。しかし、その狩猟者の数が減少しています。1976年のピーク時には約53万に達していた全国の狩猟者登録数は、銃砲の取締強化や動物愛護運動の高まりなどにより減少し、1999年には20万を切りました。総人口に対する狩猟者の割合は2000年には0.17%でした。一方、狩猟が盛んな欧米諸国におけるそれは、アメリカ7%、フィンランド5.9%、カナダ5.1%、ノルウェー4.0%、スウェーデン3.7%と(Chardonnet et al. 2002)、わが国の数十倍の値となっており、狩猟への関心の高さが示唆されます。また、わが国では狩猟者の高齢化も深刻化しており、1970年には22%だった狩猟者全体に占める50歳以上の割合は、2000年には77%に増加しました。このような狩猟者の減少と高齢化は、野生動物に対する狩猟圧に大きく影響しているでしょう。野生動物問題が激化する中で、優秀な狩猟者の確保は、今後のわが国の野生動物管理の重大な課題といえます。このような状況を打開すべく、北海道西興部(にしおこっぺ)村猟区では狩猟者および野生動物関係者の人材育成を目的とした教育プログラムが実践されています。本稿では、その取り組みを紹介しながら猟区制度を用いた狩猟者育成について検討します。

猟区とは鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律に基づく制度で、管理者が独自に管理できる有料の猟場です。西興部村猟区はエゾシカのガイド付ハンティングによる村おこしと野生動物の地域管理モデル開発を目的として平成16年に設置されました。当猟区の狩猟者教育プログラムでは、狩猟者および学生などを対象として、エゾシカ猟を題材とした室内講義と野外実習による数日間のカリキュラムを通じて、野生動物学・狩猟の理論の技術・解体・料理について総合的に学べるようにデザインされています。プログラムの重要な要素として、学識経験者と地元ベテランハンターを講師としていること挙げられます。これにより、最新の科学的知見と伝統的な地域の経験知が組み合わせられた質の高いプログラムの提供が期待されます。実際、物理学的な弾道特性や解剖学的な狙点選択などの室内講義を受けた上で、地域の野生動物や人間の土地利用の状況に詳しいベテランハンターのガイドによる安全な出猟実習や解体・料理実習を体験することで、狩猟の理論と実践をバランスよく研修することができます。また、猟区では入猟者を制限できるので不特定多数の狩猟者が不在となるため、一般狩猟者との軋轢を回避した安全な研修を実施することができます。これまでの3年間で、9回のプログラムが開催され、全国からのべ107名の参加がありました。これには狩猟学をテーマとした同様の内容の大学生実習も含まれていますが、若い世代に捕獲を見学してもらうことは、将来彼らが野生動物管理に携わる場合に必要で、現場のセンスを磨くための良い機会になるでしょう。ちなみに、実習参加をきっかけとして東京農工大学に「狩部」というサークルが発足したそうです。

野生動物管理の担い手として自衛隊を、という意見がありましたが、健全な野生動物管理のためには、できる限り地域の生活の主役である地域住民が主体となった体制づくりが検討されるべきでしょう。このとき必要となる狩猟技術は、それぞれの地域で長年に亘って培われてきたかけがえのない文化の一端であり、それを習得するには多くの経験を積んだ地域の猟師から、狩猟の楽しみも含めて地域の若い狩猟者が少しずつ体で学んでいくことが理想となります。私事ながら、私の師匠は有害駆除の檻にクマが入る度にその止めを私に差させ、野外でクマを撃たねばならなくなったときの演習をさせました。しかし、そのような「研修の場」は狩猟者減少などにより多くの地域で機能していないのが現実です。このため、上記のような猟区制度を利用するなどして専門家と地域を連携させた研修ステーションを全国各地に配置していくのも検討に値すると思われます。このとき、野生動物問題の種類とその対策は地域によって異なるので、それぞれの事情に応じた研修の内容が必要とされるでしょう。貴重な文化でもある狩猟技術が失われる前に、若い世代の狩猟者と野生動物関係者を効果的に育成していくためのシステムづくりが、今後の野生動物管理のひとつの重要な課題となっています。

引用文献

Chardonnet, P., Clers, B., Fischer, J., Gerhold, R., Jori, F., & Lamarque, F. (2002). The value of wildlife. *Revue Scientifique et Technique*, 21, 15-51.



市民活動による野生動物被害管理の可能性

吉田 洋（獣害対策支援センター・山梨県環境科学研究所）

1. 野生動物による被害の発生要因

私が住んでいる山梨県の富士北麓地域では、イノシシやサル、クマなどの野生動物の集落への出没が、社会問題化しています。そこで私は、被害とその対策の現状を把握して、その問題点の抽出と、今後の改良に役立てることを目的として、調査を実施しています。

私が観察した結果、サルが集落で食べていた農作物由来の食物のうち、36.2%は人間にとっての無価値物、つまりゴミでした（吉田ほか：2006）。具体的には、収穫適期が過ぎても放置されている野菜や果物、野生動物に摂食された作物をそのまま圃場に放置したものです。

これらのゴミは、人間にとっては無価値物ですが、サルにとっては『ご馳走』です。これは、クマの場合でも同じことがいえます。2006 年秋季における集落のクマ目撃地点には例外なく、付近に放置された栗や柿の木がありました（写真1）。



写真1. 収穫されずに放置された柿の木に登るツキノワグマ

また、集落におけるサル用の柵を設置していた田畑は2.8%、サルが出没した際に住民が追い払う頻度は38.3%、追い払いに参加した住民の平均人数は1.6 人でした（吉田ほか：2006）。つまり集落においては、防護柵の設置も追い払いも、十分に行われていないのが実態です。

これらのことから、野生動物が集落に出没する原因は、野生動物にとって集落が『安全な餌場』になっているからと分かりました。そのため、野生動物を集落に出没しないようにするためには、集落の環境を改変して『安全な餌場』でないようにすることが重要です。

2. 被害管理における市民活動の可能性

現在、集落の環境改変は、被害住民や地元行政が個々に実施しています。しかし、住民の高齢化と行政の財政難が同時進行している地域では、被害を軽減するレベルまでに環境改変を実施するのは困難です。

そこで、集落の環境改変を推進する体制を整えるために、市民団体「獣害対策支援センター（<http://www.k4.dion.ne.jp/~jugai119/>）」が設立されました。獣害対策支援センターでは、サルの追い払い活動を実施しており（写真2）、さらに今後は、都市住民も参加して放置された柿を収穫し、集落内のクマの『ご馳走』を減らす予定です。



野生動物は国民の共有財産です。しかしその管理の負担は、野生動物と人間の活動圏の接線に重くのしかかっています。共有財産を守るためには、一部の地域に負担を押しつけるのではなく、都市部を含む国民全体が負担を共有することが重要です。



写真2. ニホンザルを追い払う獣害対策支援センターの会員

引用文献

吉田洋・林進・北原正彦・藤園藍 (2006) 富士北麓地域におけるニホンザル野生群による農作物被害と被害防除の実態。農村計画学会誌 25 : 111-119.



クマ問題対応への自衛隊出動に思う

青井 俊樹 (岩手大学 農学部共生環境課程)

1. はじめに

2006年の里地へのかつてないクマの大量出沒、大量駆除はいまだに記憶に新しい。中部以北地方を中心に秋遅くまで人里へ出沒し、最終的に4500頭近くの個体が捕殺されてしまった。中には長野県の様に、有害捕獲697頭中144頭の放獣がなされた県もあるが、その一方たとえば山形県の様に、過去最高の676頭が捕獲され、しかも1頭も放獣されなかった県もあるなど、クマの出沒や被害管理に関する対応は、県によって様々である。

様々とは言え全般的に見ると、出沒すなわち(ドラム缶)オリで捕獲、即捕殺という対応パターンが大半の様である。対策として、早い時期にブナの凶作予察からクマ注意報を出して、住民にクマ出沒への注意を促した県(岩手県、秋田県ほか)もあるが、ほとんどの県では大量出沒後の現場対応に追われていたのが実情である。この出沒後の事後対応の多くが、オリによる捕獲であったのは上述の通りである。そこには、わが国の野生動物に対する危機管理システムの貧弱さが露呈している。

2. クマ対応の人材不足

クマの里への出沒対応の方策としては大きく二つに分けられる。それらは1)里へ出沒してきた時の被害回避のための管理対策と、2)里へクマが大量に出沒してこない様にするための生息地管理の二つである。

1)に関しては、今回の大量出沒を受けて環境省が昨年度に急遽、クマ出沒対応緊急マニュアルを作成した。このマニュアルに述べられた対応策はもちろん参考になる点も多々あるが(筆者もマニュアル作成検討委員の一人であった)、最も基本的な事項である、それらの施策を誰が実際に行うのか、という担い手対策については具体的な記述はなく、地方まかせというのが現状である。たとえどんなすぐれた対応策も、それを実施する人材がいなければ実効性に欠けるのはいうまでもない。その対策として、今年度急浮上したのが、自民党の議員団による、自衛隊の野生動物対応への出動案である。



写真1. クマ出没多発集落に、行政、大学、地元農家、猟友会が結集してクマ出没対応作業のイベントを開始。2007、5盛岡市

当初は、自衛隊なら銃も使えるので、その銃を用いた野生動物の捕獲も念頭にあったようだ。しかしさすがに平時に、しかも私有地も含むエリアで発砲するのは国民に銃を向けることにつながると、この案は取り下げられ、自衛隊OB（退職自衛官）による銃を用いない対応（危機対応、被害管理など）を考えているようである。しかしこの案は、果たして現実的な対応策になりうるであろうか？クマのような大型で、しかもたくみに人目を避けつつも人里へ侵出する野生動物に適切に対応（捕獲も含む）するには、対象動物の生態や行動、さらには生息地の地形や植生など様々な環境条件を熟知していることが求められる。

こういった面で優位性を持っていた猟友会のハンターが、わが国ではこれまで野生動物対応の前線で活躍してきた。しかしそのハンターが急速に減少および高齢化し、現在全国で20万人を切っている。しかもそれらのハンターのすべてが大型獣に対応できるわけではない。そこでその代替案として浮上したのが、自衛隊の利用であるが、如何に自衛隊OBといえ上述の野生動物や、土地に関する知識や経験がなければ、適切な対応はおぼつかないであろう。少なくとも都会に住んでいるOBをにわか仕立てで教育しても即戦力にはなりえない。

やはり野生動物の生態を含む地域の実情（営農の現状や森林の状況なども合わせて）を知った人でなければまともな管理をおこなうのは無理である。また本来の生息地である山野の管理の現状まで、見識が及ぶことが望ましい。そのためには、やはり各地域に密着し、住民の顔が見え、かつ専門的な知識を有する人材の育成が、今後ハンターにその役割を期待できない現状にあっては急務である。

官、民を問わず野生動物管理の専門家を少なくとも都道府県で最低でも数名、育成・配置することが望ましい。昨年のクマの異常出没を受けて、2007年2月に東大で開催したクマ出没緊急ワークショップでは、JBNとしては全国で300名の野生動物専門家の配置が望ましいという要請を総務省他に出すことを決定した。300名は最終的な要望であるが、少なくとも各県数名の配置は、早急に検討しないとハンターの今後一層の減少に対応しきれなくなり、いよいよ全国の里地・里山で野生動物たちが我が物顔で闊歩する時代が目前に迫って来ている。



3. 地域住民を巻き込んだ対応

野生動物専門家の育成・配置はもちろんのことであるが、農家や住民を巻き込んだ地域連携型の管理対策も必要である。その点で、岩手県盛岡市では、2007年より画期的な活動を開始した。2006年にまさにクマが異常出没した盛岡市郊外の、リンゴ栽培を主とするある集落では実に13頭ものクマがオリによって駆除されてしまった。そこで2007年度当初より、盛岡市の農政部局を中心に、岩手大学と、地元農家および地区猟友会が協力し合い、クマがよく出没する地区において、リンゴ園周辺の草刈り、ヤブ払い、出没多発リンゴ園の電気牧柵設置、忌避剤の散布などを数次にわけて実行することになった。初回のイベントには合計70名を越す人たちが集まり、大々的に開始された。その成果の評価はすぐには下せないが、最も評価すべきはクマの出没を実際上防ぐこと以上に、地元農家が行政まかせではなく、自らも対応に乗り出したことである。



写真2. 昨年大量にクマが出没したリンゴ園の周囲で電牧張り

今後は野生動物専門家の配置とともに、地元住民の自助努力をサポートするシステムの構築も、自衛隊出動以前の問題として必須であると考えている。



今回の特集では、野生動物管理の場に自衛隊が登場する案が出たいきさつを探ってみました。

前半では、有害鳥獣駆除の担い手である狩猟者の減少という自衛隊登場の直接的な要因についてご紹介いただきました。わが国の狩猟者は減少の一途を辿っており、野生動物管理の担い手となる若い世代の狩猟者の育成が緊急課題として浮かび上がってきました。

後半では、野生動物にとってのご馳走を市民活動によって減らそうという取り組みや、大学と地域が一体となって草刈りや電柵張りなどの被害防除対策に取り組み始めた事例をご紹介いただきました。

野生動物の農林漁業被害には、解決しなくてはならない問題が山積しており、これらの問題に対して長期的かつ根本的な解決策を講じていくためには、現場で対応できる人材の育成が鍵となっているように思われました。

今回採り切れなかった点もまだまだあるかと思います。今後メーリングリスト上でも話題にしていだけましたら幸いです。最後に原稿執筆を快くお引き受けいただきました葛西さん、伊吾田さん、吉田さん、青井さん（掲載順）に心より感謝申し上げます。（編集部・担当：齋藤正恵）



クマ問題を解く Q&A

Q. クマを追い払うってどういうこと??

担当 知床財団 葛西真輔

A1 北海道の知床国立公園では大きな音のする轟音玉、銃器から発射する威嚇用のゴム弾や花火弾を使用し、追い払いを行っています。大きな音や閃光などでヒグマを驚かし、クマが人を避ける行動を取るように誘導しています。

追い払いだけでクマと共存することは可能か？

答えはノーです。クマを追い払うことはクマとうまく付き合っていくための方法の一つにすぎません。例えば、クマの生息地では、食料やゴミなどをクマが手に入れられないように車内や家の中に保管する。交通事故により死亡したシカの死体を道路上から迅速に回収するなど、クマを寄せ付けないようにクマの誘引物（食べ物）を管理することも重要です。また、クマが入って欲しくない場所には電気柵を設置することも方法の一つです。追い払う、誘引物を管理する、電気柵を設置するなど、最大限の努力をしてもなお、同じクマが繰り返し問題を発生させる場合には、そのクマをやむを得ず駆除するという必要もあるかもしれません。



写真 キャンプをしている駐車場の裏はクマの住む場所。このようにゴミを車外に放置する行為は、ヒグマを人の近くに誘引し、無用なトラブルを発生させる可能性がある。

表紙の写真、大募集！

ニュースレターの表紙には、各地のクマやクマに関係する写真を掲載しています。なかなか文字では伝わらない雰囲気やその様子など、クマが写っていないくても、クマに関係することでしたら、どのような写真でも掲載していこうと思っています。

お写真と共に、100字程度のコメントがあると写真の様子が伝わるので、コメントと共にいただけると、助かります。

皆様からの**1枚**を、編集部ではお待ちしております。よろしくお願いします。

連絡先: JBN ニュースレター編集長 小池伸介 50005953007@st.tuat.ac.jp



開催報告

企画展

「―立山カルデラの生き物たち

―ツキノワグマの鼓動」

後藤優介（立山カルデラ砂防博物館）

去る7月21日～9月2日、富山県にある立山カルデラ砂防博物館においてクマの企画展が開催されました。立山黒部アルペンルートの玄関口に位置し、夏休みの行楽シーズンには多くの方々に見て頂くことができました。企画展の様子を報告させていただきます。展示は写真を大きくプリントしたり、立体的に配置するなど、見ている人が森の中にいるような、はたまたそこに住むクマの気持ちになって見られるよう心がけました。

● 入り口に入ると…

「あら、かわいい仔グマちゃん」「すごい爪、これで引っかかいたら恐ろしい」。入り口に置かれたツキノワグマの剥製を見ての最も多かった一言です。実はこのクマ、体長140cm、推定体重70kgの立派な雄の成獣です。クマは「とてつもなく大きくて、鋭い爪をもった怖い動物」という思いと「かわいい動物」という二つのイメージが錯綜した動物であることを改めて感じました。

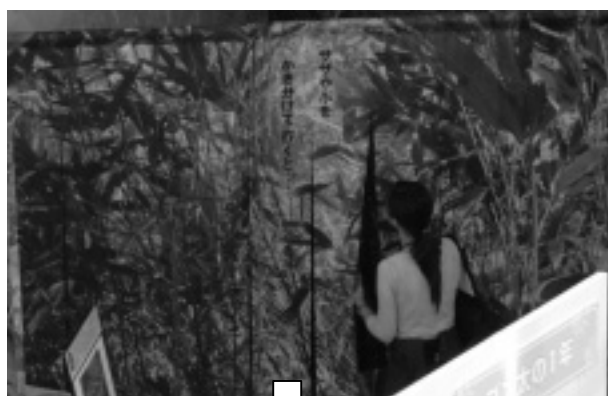
● ゴン太の一年（立山カルデラでの採食メニュー）

立山カルデラ周辺で採食が確認されたクマの食べ物や利用した環境について、季節をおって展示しました。ゴン太（VHF首輪を付けたクマの名前）が使ったブナの大木にできた冬眠穴、5月ごろから好んで採食するネマガリタケのタケノコ（通称ススタケ）、ミヤマシシウドの茎のやわらかい部分、石の下のアリの巣（成虫のほかに卵やマユ、さなぎなどをなめとして食べます）、ヤナギの大木の中にできたニホンミツバチの巣（木に穴をあけて巣ごと食べていました）などです。中でも、ススタケは人間も大好物。ササ藪のなかでは人もクマもタケノコ探しに一生懸命で、バッタリ会ってしまう機会も多くなります。早めに人間の存在を気づかせることが重要であることを伝えるため、ササ藪ののれんをくぐるとクマがタケノコを食べているビックリ仕掛けにしてみました。クマのアリ採食シーンの再現では、ジオラマを用いて、石をひっくり返すと、その下にアリの巣の映像（地上の卵やさなぎなどをせっせと卵を地中に運ぶ様子）が流れ

るようになっていきます。卵やマユがたくさんある場合や、少ししかない場合など4種類の映像があり、気持ち悪いと言いつつも、こんなに小さい物を集めて食べているんだと実感していただけたようです。



入り口に置かれたツキノワグマの剥製



上 ササ藪をかき分けていくと…

下 クマがススタケを食べていました。



● ナナコの2週間・イサオの1週間 (GPS 首輪追跡に見るクマの日々の行動)

なかなか想像しにくいクマの生活ですが、GPS 首輪を用いることにより垣間見られるようになりました。ナナコの一日の行動軌跡を地図に合わせて、範囲は意外に狭いことに驚いたり、イサオが朝 5 時半ごろにピタッと起き出し、1 時間ぐらい昼寝をし、夕方 6 時半ごろにはぐっすり眠りにつく昼行性の生活をしていることに親しみを感じたようです。



クマのまねをして石をひっくり返すとアリがたくさん！！

● 芦峯寺の狩山師

立山山麓の芦峯寺の集落。ここには山で生きる達人「狩山師」たちの伝統が受け継がれています。昭和30年前後の狩りの様子を撮影した写真や、クマを仕留めるのに使用した槍、カモシカの毛皮で作られた靴、木製のスキー、乾燥させたクマの腸など、当時の狩猟道具や加工品なども展示しました。またそのころに撮影された白黒映像フィルムと現在もクマ狩りを続けている方へのインタビューを合わせた映像を製作しました。日常生活の中で山に入ることがほとんどなくなった現在、自然とともに生活してきた狩山師から学ぶことは多いのか、見入っている方が多くみられました。

● 特別企画

大型映像ホールにて動物写真家の横田博氏が撮影した「ツキノワグマの1年」の映像上映とトークショーを行いました。木上でドングリを食べたり、水浴びをして遊んだり、仔グマにお乳をあげたりと、めったに見られないクマの日常の姿をすばらしい映像で堪能しました。百

聞は一見にしかず、映像の持つ力を改めて実感しました。

■ あとがき

夏休みの自由研究の課題として取り組んだ中学生の中で、「僕は今までクマが嫌いでした。今回調べてみて、好きにはなれませんが興味のある動物に変わりました。」というたいへんうれしい感想をいただきました。他にも「ドングリを剥いて食べるとは器用だね。」「草を食べるのは初めて知りました。」などの感想を頂き、今回の企画展がクマについて少しでも関心を持つきっかけになれば幸いです。そこから一人でも多くの人が山にをかけて動物が住む事実を肌で感じていただければと願っています。

企画展の開催にあたりたくさんの方のご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。



昭和30年代の狩りの様子と使われた道具



参加報告

「ブナ林と狩人の会・マタギサミット」 に参加して

根本 唯 (東京農工大大学院)

今回のマタギサミットではパネルディスカッションにおいて「何故、クマは里に下るか：マタギの本音」という題で秋田県・山形県・長野県に住んでいるマタギの方達から話を聞くことができた。特に去年は各地でツキノワグマの人里への大量出沒が起きた年であるため、マタギの方々が活動している現地の当時とその後の様子や現在のツキノワグマの保護管理についてマタギの方々の意見を聞くことができると思い興味をもって参加した。



会場は満員でした。

2006 年の大量出沒についてはマタギの方々は堅果など山の食物の不足の影響のほかに、人里域を生息域とするクマが増えていることが原因と考えているようだった。大量出沒後の今年の春についてはこれまでの年と変わらない数のクマが目撃できているようである。そのためか、ツキノワグマの個体数自体が増加していると考えている人も多かった。

これらのことから、マタギの方々が言いたかった本音はひとつであると感じられた。それは春グマ猟をやりたいということである。彼らは春グマ猟による事前の個体数管理を行うことがツキノワグマの保護管理を行う上で重要なことと考えているようであった。彼らの話によると人里域を生息地としているようなクマは他のクマの圧力によって奥山域に上がれないことやそのことも含めて人里の環境の方が奥山より過ごし易い環境になってい

るといったことによって発生しているらしい。確かにこのようなことが実際に起きているのなら奥山域における個体数の間引きは効果があるかもしれない。しかし、いまのところ春グマ猟がツキノワグマの大量出沒を抑えることに効果があるという話も聞かないし、それだけでは里付近を生息地するツキノワグマの増加は抑えられるかもしれないが現在いるクマが単純に減少するとは考えにくい。もしかしたら彼らが活動している地域では効果が現れているためわかりにくくなっているのかもしれないが、いずれにしても、春グマ猟がどのような方法で行われ、それによる効果を評価するなど詳しい調査が必要ではないかと感じた。そのためには彼らと研究者との間に深い信頼関係を作る必要があると思われるが、それこそが一番困難なことであると思う。しかし、その困難を乗り越えたときには大きな利益があるのではないだろうか。研究者にとっては調査地の詳しい情報を常に持っている彼らは非常に貴重な存在となるだろう。研究者とマタギのようなクマに関わる地元の人々が連携できれば研究もより進展するかもしれない。



総合討論の様子。

「春グマ猟を行いたい」というマタギの方々の意見はある程度予想できたことであった。しかし、私は春グマ猟といえば伝統的な意味合いの方が強く感じていたので、個体数管理の目的で春グマ猟を行いたいと強く訴えていたのは印象的であった。全編を通してその訴えをすることからもマタギにとって如何に春グマ猟が重要なものであるかが改めてわかったパネルディスカッションであったと思う。



「ブナ林と狩人の会・マタギサミット」

に参加して

中島亜美 (東京農工大)

「マタギサミット」という名前からして面白そうな集まりに、どんな話が聞けるのだろうと楽しみに思いながら初めて参加しました。特にパネルディスカッション「何故、クマは里へ下りるか：マタギの本音」は、クマの里への出沒についてマタギたちの本音が聞けるのか！これはおもしろそうだ！と思いながらききました。

マタギの方たちが自分たちのクマの里への出沒に対する見解を述べていく中で、ひとつ特に印象に残った話題がありました。クマの有害駆除を「オリ」ですることについてです。今まで私はそれに疑問を持ったことがありませんでした。「オスもメスも子供も全部無差別にとってしまう」「お腹のすいたクマをエサでおいでおいでと言っておいて、獲るなんて卑怯だ」「本来クマを獲るのは人間とクマの知恵比べでロマンがあるんだ」などなどいろんな意見がありました。そこで思い出したのが私の大学の実習であった出来事です。それは一年生向けの実習で北海道へ狩猟の現場を体験しにいくというものなのですが（私は参加しておらず聞いた話なのですが）実習中に有害駆除のクマがちょうどつかまり学生の前で射殺したそうです。その学生たちの反応は狩猟でシカを獲るのを見たときと違い、オリの中のクマを射殺したときは泣き出してしまった子もいたそうです。感じ方は人それぞれだろうけど、やっぱりオリの中で逃げ場のない動物を殺すのと銃でとるのは全然違うことなんだなと思いました。



懇親会では様々な催しが開催されました。

それが去年は5000回以上も繰り返されたのか、と思いました。数字で5000、といってしまうとなんだか多いなと感じるだけで実感がわかりませんが本当はその数よりも大きな問題なんだと感じました。「テロで100人死者ができました」と聞いて「100人もか、大変な事件だな」となんとなく思ってしまうますが本当はその100人に一人ひとり家族がいて人生があって・・・と数字では表せない大きさがあるはずです。数字にしてしまうと1つの数字にしかならないけど、それ以上の想像を超える何かがあることを忘れてはいけないと思います。クマに対して、このクマには家族がいて人生があって・・・とそこまで感情移入する必要はないと思うけど、去年の大量捕殺が数字で表される以上に重大なことなんだと重く受け止めなければいけないと思いました。そして、クマについて研究する一人として頑張っていこうと思いました。



会場の外では学生会によるグッズの販売も行われました。



「哺乳類学会 自由集会(3部)および IBA2006 の打ち上げに参加して…」

**濱口あかり (NPO 法人信州ツキノワグマ研究会・
JBN 学生部会 グッズ担当)**

15 日の自由集会の第 3 部は、様々な地域で行われている「保護管理に関するモニタリングの現状と課題」についての発表がありました。異常出没などによるクマ問題が毎年のように取り沙汰されている中で、クマの生息する地方自治体の担当者は予算との兼ね合いも含め、どのようにクマを保護管理していくかというのが大きな課題となっていますが、試行錯誤している割にはそれぞれの地方自治体の保護管理の目標や方法などはあまり表には出てきません。しかし今回の自由集会では、先進的に保護管理を行う都道府県の発表の後に、各都道府県がクマをどのような位置づけで見ているのか、どのモニタリング方法をとっているのかなど全国的な傾向を知ることができ、今まであまり表に出てこなかった“実際のところ”が少し明るみになったように感じました。

ただ、ヘアトラップ法や定点観察法、再捕獲法など様々なモニタリングを基に推定個体数を算出しているものの、どの都道府県においてもその信憑性に関しての疑問はぬぐいきれず（全県的に行う事が出来ていないという理由）、また学習放獣の効果についても近年見直されるところにきていることは事実で、保護管理にとってまだまだ課題は多いという見解が多く見られました。また都府県をまたいで移動する個体のことを考えた個体群単位での管理というものに対してもっとお互いに協力し合って行く必要も感じられました。

今後過疎化が進み、人の住む場所が都市化することでクマ問題が解決に向かうのではないかという見解もないのですが、地方自治体が積極的に取り組んでいるというのが見えることはそこにすむ地域住民の意識を変え、恐怖心も軽減させてくれるかもしれません。そうすることで皆の意識を高めることも、保護管理の一環として大事なことのひとつではないかなと思いました。

自由集会のあと約 1 年という期間を経て IBA の打ち上げが行われました。実行委員会の方々をはじめ、打ち上げにはそうそうたるメンバーが参加されており、すごい会議に自分が関わったことを改めて幸せに思いました。私はスタッフとして共に走り回った仲間との久しぶりの再会を果たし話が出来たことが一番嬉しかったです。皆それぞれにクマへの思いは変わらず熱く、尽きない話に時間はあっという間に過ぎていきました。

その他の場所でも立場や年齢の差を飛び越えて熱く語り合われておられるのを見ていて、世の中がこのような立場や年齢関係なく互いに認めていけたら、いいのにな。と感じずにはいられませんでした。クマを通して、そんな素敵な人々に出逢えたこと、また素敵な時間をすごせたことを本当に幸せに思います。

IBA で出逢えた全ての方に感謝を申し上げるとともに、小坂井さんはじめ打ち上げを計画してくださった方々、本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。

「2007 クマフォーラム in 上川町 (ヒグマの会)」

小林喬子 (日大)

毎年ヒグマの会が主催している『クマフォーラム』が、今年は 7 月 14、15 日に北海道上川町で行われ、初めて参加しました。1 日目はヒグマの会関係者で、大雪山国立公園の大雪山高原沼めぐりをしました。大雪山高原沼にはヒグマが多く生息しているため、高原沼めぐりコースの利用者の教育と入山規制をするために 1994 年に高原温泉ヒグマ情報センターが開設されました。入山山口はこのヒグマ情報センター 1 つに限られ、入山者はここでヒグマの生態や環境について知ることが出来る仕組みです。私たちもヒグマ情報センターにて、今年のヒグマ目撃情報についての話を聞きました。数日前にもクマの目撃があったので期待を抱きつつトレッキングに出発しました。ルート沿いには、ミズバショウ、ウコンウツギ、エゾコザクラなどが咲いていました。ルートも中盤になると残雪があり、雪渓を臨むことが出来ました。実際にクマを見ることは出来ませんでしたが、自分の調査地（北海道浦幌地域）とはまったく違うクマの生息地を歩くことができ、雄大な景色に感動し、また他の季節にも訪れたいと思いました。

2 日目は上川町内の施設にて、『国立公園のヒグマを考える』をテーマにした講演、パネル討論が行われました。講演ではまず、北大ヒグマ研究グループの大雪山ヒグマ調査の内容や、1992-1996 年にかけて行われたヒグマの定点観察から明らかになったヒグマの生態の報告と、ヒグマを観察できる国立公園としての今後の公園利用に関する提案などがされました。その後、ヒグマ情報センターの活動や課題、知床国立公園のヒグマ保護管理についての発表がありました。ヒグマ情報センターは国立公園における利用者教育と入山規制を兼ねる先駆的な試みをし



ている重要な施設です。しかし、施設の運営や収集データの整理・研究を進める人材や予算が不足していることが大きな課題になっています。パネル討論では主にこれらの課題について話し合われました。人材や予算が不足していることへの直接的な解決策を導くことは難しいですが、国立公園におけるヒグマの保護管理について、現場で携わっている方々から具体的な問題点を参加者が受け取ることが出来たと思います。

自分の調査地とは違う『国立公園』という特別な環境でのヒグマ保護管理の課題を直接それに関わっている方々から聞くことができた良い機会になったと思います。国立公園での調査、研究は重要な課題なので、これから良い方向に進んでいけばと思います。

活動報告

ヒグマ研究グループ紹介

**滝波洋人 (北海道大学大学院
・北大ヒグマ研究グループ)**

北大ヒグマ研究グループとは？

北大ヒグマ研究グループ（以下、クマ研）は、1970年代初頭に北海道大学の大学院生が「ヒグマを見てやろう」という動機のもと発足したサークルです。その後、学部生も参加し、現在では学部生を中心に調査計画・本調査・調査報告といった研究の卵のようなことをしています。

現在は男子15名、女子7名の構成で、北大天塩研究林、大雪山国立公園、十勝浦幌町、札幌市近郊林を主なフィールドとして活動しています。自分でアイデアを出し、チャレンジするというスタンスで調査を運営しています。

調査フィールドと研究内容

北大天塩研究林（道北天塩地域）

1975年の予備調査を契機に以降、中断期間3年を挟むものの、現在まで続いている調査フィールドです。約2万haの研究林内の沢沿いや林道をヤブこぎも交えながらひたすらに歩き、ヒグマの痕跡を探して記録するというシンプル（ですが、体力勝負）な調査手法をとっています。痕跡記録は地図上の位置、痕跡種、新旧等を詳細に記録し、一年毎に日誌として保存してきました。多くの

クマ研人にとっては入部して初めて行く調査地であり、ヒグマの生態や地区読み・山歩きを学ぶ場所でもあるので、思い入れのある調査地となっています。

北海道のヒグマの生息密度・生息域は春グマ猟の影響で1960年代～1990年の間に大きく減少しました。特に丘陵地帯である道北地域は、猟のしやすい地形が手伝って、密度減少と生息域縮小が顕著だったと考えられています。しかし、現在では天塩研究林内のヒグマの痕跡密度、痕跡分布域が明らかに増加・拡大しており、それがヒグマ個体群のどのようなメカニズムによって起きていることなのか？想像が掻き立てられます。今夏は自動撮影カメラを用いた個体識別を中心に、ヒグマの生息密度の推定や利用地域の重複があるか、明らかにしようと試みています。

大雪山国立公園（道央大雪山系）

ヒグマを見ようという言葉通り、望遠鏡・双眼鏡による行動観察が中心の調査です。初代クマ研が入った最初のフィールドでもあります。日本一大きな国立公園の中、調査地選定は長年の試行錯誤がありますが、クマの利用が安定して見られ、アプローチが容易ということで、ここ何年かは旭岳―黒岳間にある直径2kmほどのカルデラ地形（お鉢平）で行われています。カルデラ内壁にはハイマツ（球果）や高山性せり科草本が広がっており、ヒグマの重要な季節的利用地域になっていると考えられています。行動観察では、クマの行動を大きく移動時間と採食時間に分け、同時に移動ルート、採食種などを記録しています。クマ研の調査では唯一直接ヒグマを見に行く調査で、人気があります。

大雪山はヒグマの生息地域であり、毎年多くの登山者が利用する地域でもあります。そのため、人間とヒグマの接触という可能性を常にはらんでいます。そこで、近年はヒグマの登山者や他個体に対する警戒・回避行動に着目し、警戒・回避機会がヒグマの行動にどのような影響を与えるか、明らかにしようと試みています。

浦幌町（道東十勝地域）

日大の教員でクマ研OBでもある佐藤喜和氏が調査研究をしている浦幌地域で、佐藤氏や日大生のご協力のもと調査を行っています。ここでは天塩と同様に痕跡調査を中心に行っています。浦幌は笹が小さく、林道中心の調査です。体力的に負担の少ない調査地なので、釣りに勢を出す人、紅葉を楽しむ人、昼寝ばかりする人等、自然に入ることを最も楽しむことが出来ます。

ここでは秋のヒグマの採食物を糞内容から同定し、同



時に資源量調査を行いヒグマの食性の季節・年変化を見てきました。浦幌町は、もともとヒグマの農作物被害の多い地域であり、多くのヒグマが捕殺されています。今後の課題は、自然資源や農作物の利用可能性の変動とヒグマの行動の関係を追っていくことです。また、日大生と交流できる利点を生かして多くを学びながら調査研究をしていきたいと思っています。

札幌近郊林調査

ここ数年で本格的に痕跡調査を始めているフィールドです。昨秋・今春は、冬眠穴を探し出すことを目的に、毎週末、札幌近郊の山中で、雪に残った足跡のトラッキング調査を行いました。長時間のラッセルもむなしく、冬眠穴を探し出すことは出来ませんでした。多くの足跡を発見し可能性を感じることができました。ちなみに足跡の発見場所は、住宅地と1 kmと離れていないところでも見つかっています。

200万人都市札幌は都心から1時間弱で、原生林に行くことが出来る、恵まれた環境にあります。しかし、同時にそれはヒグマの生息地が隣接していることと同義なのですが、ヒグマの情報は乏しく、札幌市民はその意識が高くありません。今後の課題は、まだまだ未知数なフィールドであるので、週末に行くことも出来る利点を生かして泥臭くも痕跡調査を続けることです。そうすることで天塩研究林のような個体群変化のサインが見られるかもしれません。

今後のクマ研

以上、各フィールドの特徴、課題を述べてきました。今後のクマ研：研究サークルとしての課題は、一年一年のスパンで物事を考えるのではなく、長いビジョンをそれぞれが持って活動していくことです。なかなか結果は出ないですし、代替わりが激しく難しいことだと思いますが、ヒグマという行動圏が広く、寿命も長い動物は一年やちょっとの傾向ではわからない事が多いのです。しかし、同時に一つ一つの調査自体、自然に入っていくことの意義・楽しさを見つけ、決して忘れないでいこうと思います。



写真は2004年に大雪山の調査での北大ヒグマ研のメンバー。日大の方々と共に。



JBN 学生部会報告

小坂井千夏 (東京農工大)

JBN-cubs (JBN 学生部会報告)

1、勉強会 (クマゼミ) 報告

クマゼミは学生を中心とした若手クマ関係者の勉強会です。今回は2007年6・8月の報告です。各々、野外調査シーズン真っ盛りで日程の調整が難しく、レギュラーメンバー全員の参加は難しかったのですが、初参加の学部生が多かったことや、今春就職したメンバーとの久々の再会など、(ゼミ後の行きつけのお店での懇親会も含めて) 実りあるものとなりました。

日時： ①2007年6月28日@東京農工大学 ②2007年8月27日@東京農工大学

発表者：

①中下留美子 (首都大学東京)

「窒素・炭素安定同位体による養魚場における捕獲ツキノワグマの食性履歴の推定」

②阪本芳弘 (岩手大・修士卒業)：修士論文の発表 「農作物被害の発生時期におけるツキノワグマ (*Ursus thibetanus*) の行動特性および環境選択」

2、JBN-student spotlight

JBN 学生部会メンバーの研究紹介を兼ねた自己紹介コーナーの4回目です。学生部会メンバーが順番に、自分の研究テーマを中心に、自分のクマとの関わり・クマへの想いなどを自由に紹介していきます。今回は前号に引き続き、日大の浦幌チームから伊藤くんです。修士論文の完成が楽しみです。

伊藤哲治 (日本大学大学院 生物資源科学科 生物資源生産科学専攻 博士前期課程)



ヒグマの糞と著者。

JBN の皆様、こんにちは。私は、日本大学大学院修士課程2年の伊藤哲治と申します。私は、ヒグマの「マイクロサテライトマーカーを用いた個体識別、血縁関係推定のための、ヒグマ (*Ursus arctos*) の遺伝的多様性の検討」という研究をおこなっています。

この研究はヒグマの被害を管理し、また地域個体群を保全するために、地域個体群の繁殖状況や遺伝的変異を明らかにすることを目的としています。本研究では、北海道東部に位置する浦幌地域において、有害駆除された個体の試料から、マイクロサテライトマーカー24座位の多型解析をおこない、その結果から個体識別と血

縁関係の解析に最適なマイクロサテライトマーカーの組み合わせを検討しています。今まで解

析されていたマイクロサテライトマーカー16座位での個体識別および血縁関係推定では、オス22頭、メス16頭の計38頭が個体識別されており、推定年齢、mtDNAコントロール領域の情報と合わせて解析した結果、浦幌地域のオスには



見られないハプロタイプ HB13 をもった3頭の移入オスと、浦幌地域で分布しているハプロタイプ HB2 をもつオス1頭が父親候補となる、6組の父子関係が検出されました。これは、浦幌地域では北東方向からの移入個体が父親になることが多いことを示唆しています。しかし、個体識別と血縁関係の解析に最適なマイクロサテライトマーカーの組み合わせの検討をおこなうことにより、さらなる血縁関係を検出することができるのではないかと考えています。

私がヒグマの研究を行うきっかけは、大学でなにか哺乳類の研究をしたいという目的があったので大学3年生のときに森林動物学研究室に入りました。研究テーマを決める際に佐藤喜和先生の浦幌地域のヒグマの研究のお話を熱く語っていただき、その熱い思いに心動かされ、夏に調査のお手伝いに参加しました。山や畑などでの DNA 解析のための毛の採集や、畑の被害対策をおこなっていくうちに、是非ヒグマの研究をしたいと思うようになりました。そのなかでも DNA を用いて血縁関係を調べることができればよいと考え、先生に相談してみたところ、GO サイン!! がでたのでこの研究を行うことになりました。



佐藤先生(左) と著者(右)。



実験中の著者。

最初は DNA の実験の大変さや結果の解析に戸惑いながら研究をおこなっていましたが、解析結果や、結果からわかる血縁関係が明らかになると、その楽しさを覚えてしまい、さらに詳しくこの研究を追求したいと考え修士に進みました。今では、さらに DNA 実験漬けの毎日ですが、良い結果が出たときの感動やうれしさに出会えるように日々突き進んでいます! また、ゴールデンウィークや、夏季休暇などの長期にわたり大学が休みのときには浦幌に赴き、フィールド調査の手伝いをする事により気分をリフレッシュしたり、試料がどのような場所で採取されるのかなどを学んだり、野外でも楽しく研究をおこなうように心がけています。

これから修士論文にむけてのラストスパートが始まります。自分の研究の集大成となるように全力で取り組んでいきたいと思います。そして自分の研究結果が、少しでもヒグマの保護管理や他の研究にとって有益なものになることを祈っております!!

3、学生会メンバー募集中!!

学生会では、クマゼミ(勉強会)、学生会用メーリングリストでの情報交換やグッズの製作販売などの活動をしています。今後は、もっと活動の幅を広げたいと思っています。

学生に限りませんので、若い JBN 会員の皆さんの参加をお待ちしています。興味のある方、ご質問のある方はお気軽にお問い合わせ下さい。

kozakaic@ybb.ne.jp (代表: 小坂井)



ツキノワグマの学名のはなし その1

下稲葉さやか（京都大学）

クマに関わりのある皆さんは、本や論文、または動物園や博物館での説明書きなどでも、しばしばクマの学名を目にする機会があると思う。今回の連載ではツキノワグマを例にとり、学名とはどんなもので、どのように決定されてきたのかを紹介していきたいと思う。

学名の基礎知識

まず、学名とは何だろうか。生物には、様々な生物学の特徴、例えば形態などの類似などによって、同じ種類のものと識別できるグループ、つまり「種」と呼ばれるものがある。この「種」に、生物学上、世界中に共通することばで名前をつけたものを学名と呼んでいる。例えば、日本では「ツキノワグマ」、中国では「黒熊」、アメリカでは「Asian black bear」と呼ばれている動物は、学名「*Ursus thibetanus*」で表されることによって同じ種類であることが分かる。

種の学名はラテン語のイタリック体によって、属名と種小名の2語で表され、その命名者の名前と出版の年号を引用することもある。ツキノワグマの場合、*Ursus thibetanus* G. Cuvier 1823 である。種をさらに細分類する亜種名では、種名の下に亜種名をつけて3語で表現される。日本のツキノワグマを亜種ニホンツキノワグマとして学名で表現する場合は、*Ursus thibetanus japonicus* Shlegel 1852 となる。また、属名が最初に命名された後から変更された場合のみ、命名者と年号は括弧に入れられる。例えば、ツキノワグマを最初に含められた属である *Ursus* 属ではなく *Selenarctos* 属とする場合には、*Selenarctos thibetanus* (G. Cuvier 1823) と表されることになる。

ツキノワグマの命名

さて、ここからはツキノワグマの学名の記載の歴史、つまり学名をつけられたきたいきさつを紹介しようと思う。

ツキノワグマ学名を与えたのは、天変地異説を唱えた事で有名な、フランス人の Georges Cuvier である。Recherches sur les ossemens fossils という化石を記述した本のシリーズのうち、1823 年にパリで刊行された第4巻 325 頁のフットノートに掲載された記事が記載文、すなわち、ツキノワグマの特徴を記述して有効な学名を与えた最初の文章となった。その内容は、G. Cuvier の義理の息子である M. Duvaucel から送られてきた、アッサム地方のシルヘットで撮影された写真のツキノワグマの特徴を詳細に記述したものであった。その写真のクマを、*Ursus thibetanus* と名付けることが文中に明記されている。さて、ここで読者の方々は、なぜ「*Ursus thibetanus* G. Cuvier 1823」であって、「*Ursus thibetanus* Cuvier 1823」でないのか、「G」の存在を疑問に思われるかもしれない。実は、G. Cuvier の記載文には『弟の Frederic Cuvier が、その写真を掲載した本を近いうちに刊行する』という文章がある。その言葉通り、翌年 1824 年に弟 F. Cuvier の本は発行された。その文中で F. Cuvier は、その写真のクマを *Ursus tibetanus* と命名する（‘th’ でない!）、と記述してしまったのだ。F. Cuvier は「*thibetanus*」でなく「*tibetanus*」という異なったスペリングの学名を与えてしまったため、*Ursus tibetanus* F. Cuvier 1824 という学名は、*Ursus thibetanus* G. Cuvier 1823 と同じ種類の動物に異なる名前をつけた「同物異名（シノニム）」ということになってしまった。学名には先取権、平たく言うと早い者勝ちという規則があるため、1年早かった兄の G. Cuvier の学名が有効となる。従って、ツキノワグマには同じ Cuvier という姓の複数の著者（命名者）が、異なる学名を与えたことになったため、それぞれの学名の著者名に「G」、「F」をつけ、区別することになったのである。（つづく）

引用文献

Frédéric Cuvier and Etienne Geoffroy Saint-Hilaire (1824) Histoire Naturelle des Mammifères, avec des figures originales coloriées, dessinées d'après des animaux vivans; publiée sous l'autorité de l'Administration du Muséum d'Histoire Naturelle. Paris, A. Belin. Tome 3 Livre 41 (Ours du Tibet). [In French]

Georges Cuvier (1823) Recherches sur les ossemens fossils. Nouvelle edition, Paris. Tome 4. Chapitre 3, pp. 311 - 380. [In French]



1. 『会費納入のお願い』

- 今年度(平成19年4月から翌年3月まで)の会費(年2,000円)を未納の方は速やかに納入をお願いします。納付状況は本誌発送に用いたラベルの下部に記載しております。『済』は該当年度納入済み、『未』は未納です。2年以上未納の方には、未納分を納入されるまでニュースレターの発送は休止致します。また、3年以上会費を未納した場合には、自動退会となり、会費の不足分を納入しなければ再入会できませんのでご注意ください。

会費納入先：郵便振替口座／日本クマネットワーク事務局東京

口座番号／00130-1-666956

会費に関するお問い合わせ先は以下をお願いします。

お問い合わせ先：会計 亀山 (arctos@khaki.plala.or.jp)

2. 『住所変更および退会等のご連絡のお願い』

- 住所、所属、メールアドレスなど申し込み時の会員名簿登録内容に変更のある方は必ず事務局までご連絡下さい。諸事情により退会を希望される方も事務局までご一報願います。

JBN 事務局；浅野 玄 (asanojr@gifu-u.ac.jp)

501-1193 岐阜市柳戸1-1 岐阜大学応用生物科学部野生動物医学分野内

電話・ファックス：058-293-2933

3. 「アジアのクマたち —その現状と未来—」について

昨年10月に長野県軽井沢町で開催された第17回国際クマ会議に併せ、JBNより英語版レポート「Understanding Asian Bears to Secure Their Future」が出版されましたが、今回多くの方のご協力により、その日本語版「アジアのクマたち—その現状と未来—」が観光されました。総ページ146ppで、日本を含むアジア17の国(と地域)がカバーされています。

お約束どおり、JBN会員の皆さんにはお一人につき1部を無料でお配りしています。

ご希望の方は、お手数ですが下記まで返信用封筒(A4サイズ、送り先明記、切手340円貼り付けのこと)を送付の上、ご請求ください。

〒306-0622 茨城県坂東市大崎 700 茨城県自然博物館 動物研究室内 山崎晃司宛

ただし誠に恐縮ですが、今回の送付は2007年度(平成19年度)までのJBN会費を納入済みの方に限らせていただきます。JBN会計状況の逼迫のため、ぜひご理解いただければ幸いです。なお、今回のレポート出版にかかる費用は、全て助成金により賄われていることを申し添えます。

会費の納入先は上記の通りです。

JBN 副代表 山崎晃司





日本クマネットワーク（JBN）2007年度総会のご案内（9/15 現在）

会員各位

以下の通り 2007 年度総会および関連イベントを実施いたしますのでご案内いたします。皆様へのご連絡が遅くなりお詫び申し上げます。なお、内容は HP や ML で随時更新しています。

日時: 2007 年 11 月 24・25 日 (土日)

○ **24 日 13:30-17:00 (予定) (受付開始は 13:00)**

JBN2007 年度総会

＜場所＞ 福井県立鯖江青年の家 (<http://info.pref.fukui.jp/syougak/sabae/top.html>)
福井県鯖江市上野田町 19-1 tel(0778)62-1214 fax(0778)62-1215

＜交通＞ 鯖江インターより車で約 15 分(約 6 ｷﾛ)
JR 鯖江駅より車で約 12 分(約 4 ｷﾛ)
JR 武生駅より車で約 15 分(約 7 ｷﾛ)
鯖江市コミュニティバス利用の場合、豊線バス停「上野田」下車 徒歩 15 分

＜内容＞ おもな予定内容

報告事項

議題1. 代表・監査役選挙結果の件

議題2. 代表の指名による役員選出の件

議題3. 2006 年度会計報告・監査報告

議題4. 2008 年度予算案の件

議題5. JBN 事業の件

議題6. 時期総会の開催地について

その他

(議題がありましたら 11 月 13 日までに事務局にメールまたは郵送でご提示願います)

〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学応用生物科学部 野生動物医学分野内

日本クマネットワーク (JBN) 事務局 浅野 玄 e-mail: asanojr@gifu-u.ac.jp

○ **25 日 9:30~16:00 (予定)**

JBN 総会関連イベント 公開シンポ: 鳥獣害のないまちづくりワークショップ

「クマやイノシシとの付き合い方を考えよう」

主催: 鯖江市 後援: 日本クマネットワーク (JBN)

＜場所＞ 未定 (福井県鯖江市内の施設)

なお、総会および関連イベントに関するお問い合わせは、担当地区委員まで。

担当: 大西尚樹

〒612-0855 京都市伏見区桃山町永井久太郎 68 番地

森林総合研究所 関西支所 生物多様性研究グループ



目次

写真	吉田洋	
People	梶光一	31
This number: 有害駆除の今を探る		
減少していく狩猟者, その要因は?	葛西真輔	32
猟区制度を利用した狩猟者育成	伊吾田宏正	33
市民活動による野生動物被害管理の可能性	吉田洋	34
クマ問題対応への自衛隊出動に思う	青井俊樹	35
クマ問題を解くQ&A		
	葛西真輔	38
Letters From		
開催報告ー立山カルデラ砂防博物館ー	後藤優介	39
参加報告ーマタギサミットー	根本唯	41
	中島亜美	42
参加報告ー哺乳類学会ー	濱口あかり	43
参加報告ーヒグマの会ー	小林喬子	43
活動報告ー北大ヒグマ研ー	滝浪洋人	44
学生部会報告	小坂井千夏	46
Research article		
ツキノワグマの学名のはなし 1	下稲葉さやか	48
事務局からのお知らせ		49
編集後記		51

編集後記

暑く、長かった夏が過ぎ、急に秋を感じるようになりました。ニュースレターが皆様のお手元に届くころには、山では紅葉が見ごろのころだと思います。早くも、昨年の IBA から 1 年が経ったのだと思いつつも、2004 年、2006 年のような大量捕獲が無ければと思う日々です。

今号では、「有害駆除に自衛隊出動か!」という、一時メーリングリストでも盛んに意見が出された話題に触れ、その背景にある狩猟や有害駆除の現状などを、各地の報告をもとにまとめてみました。なかなか限られた紙面ではお伝えできなかった点多々あると思いますが、皆様の率直なご意見、ご批判等を含め編集部宛、あるいはメーリングリストにコメントをいただければと思います。ぜひ、次の特集へと活かしたいと思います。

ニュースレターで特集をして欲しいテーマや、クマに関して聞きたい質問、また、People で取り上げて欲しい人などがありましたら、編集までご一報ください。編集部一同、皆様のご期待に添える紙面作りをしていきたいと考えています。よろしくお願いします。

11 月には、メキシコで第 18 回国際クマ会議が開催されます。今回も日本から多くの方が参加されますので、次号ではメキシコ報告もお届けしたいと思います。お楽しみに下さい。